「紋章」論

江後寛士

一

「紋章」は、横光利一の作品のなかで、「機械」とともにもっとも高く評価されているものであろう。しかし、その評価の観点は、行動人雁金像の称賛や、「純粋小説論」に関連するものが多く、知識人山下久内の内面に立ち入った論は、意外に少ないようである。表面的なストーリーのおもしろさは、もちろん雁金の行動にあるのだが、作者に近い人物は山下久内であり、作者は主人公を久内と考えていたのではないかと思われるので、かれがそれに直接かかわる自意識の問題をどのように考えていたかを、作家横光利一論のなかに位置づけて、考察してみたい。

同時に、「純粋小説論」に関連して、四人称の方法の問題についても、若干の考察を試みたいと思う。

二

「紋章」は、昭和九年、『改造』九月号をもって、九回の連載を終えるが、その翌十月号に、青野季吉の「『紋章』の世界について」が載った。そこでは、「横光氏はこの作品において、われ〳〵の日常の現実性、日常の『自然』にまで普遍化された必然に対して、見事に芸術的現実を実現し、新らしい必然を具体化して、犇々と迫り攻め寄せてゐるのだ。」と、実験室的でない芸術的リアリティを認めて、高い評価が与えられ、その中心人物は、雁金ではなく、山下久内であるとされている。すなわち、「これは現実世界においては雁金が可能的な存在にとゞまるに反して、あくまで実在的な存在であり、われわれ自身の投影だと云つても決して過大ではない。しかし、この代表的なインテリが、同じくインテリではあるが、ほとんどインテリ性を欠いた、無苦悶な、実践一徹の雁金八郎によつて、精神の自由に目醒めしめられるのだ。そしてこゝに長篇『紋章』の核心がおかれてゐるのだ。」とし、「紋章」を、「近代インテリの複雑さ」に「何等かの精神的な支柱」を与えようとした、卓越した作品だとしている。これはすぐれた見解だと思う。

これに反して、岩上順一は、「横光利一」（昭17）において、「横光の作家的能力が、正しい文学的方向に於て示された唯一の達成は、私には、雁金の形象の創造だけだと思はれる。」と述べ、「『紋章』の芸術的な感動は、雁金と久内との対照から生じるのではない。それは、いふならば、雁金といふ人間像そのもののなかか

ら生れる。」と言って、雁金像を一方的に認めようとしている。

このように、「紋章」の評価は、自意識人山下久内を中心人物とするか、行動人雁金を中心人物とするかの論を両極として、その間に、窪川鶴次郎の、四人称不要・自意識の絶対化の論（「文学の通俗化と純粋小説論」昭11）、由良哲次の、「純粋小説」の理念を完全に具現したという説（「横光利一の芸術思想」昭12）、中村光夫の、硯友社流の風俗小説とする説（「風俗小説論」昭25）、日沼倫太郎の、社会のロマネスクを表現したのだとする説（「二流の悲劇」昭39）等があるのだが、いずれもかなり大づかみな論の展開になっているので、いま少し詳細な検討を加えてみたい。

まず、雁金像から始めよう。

狂気に近い研究心の持主雁金が、醸造に関する発明に没頭するようになった最初の動機は、没落した家産の挽回にあったのであって、芋取醤油の特許にとびついたのも「一攫千金」の夢にとりつかれてのことであった。のちには、魚の干物の特許を民衆に解放するという、無欲で、純粋なところを見せるようになるけれども、最初の動機は、決してきれいごとではなかったのである。その芋取醤油による一攫千金の夢が破れ、絶望的な窮極の果てに落ち込むと、彼の本来の性質を勃然と持ち上げてきて、発明という「純粋な希望」に燃え立っていくのである。そのエネルギー源は、次のように説明されている。

絶望の果てには、名門家といふものは私たちの想像を赦さぬほど、祖先から貫き流れて来たその家系独特な紋章の背光のために、行動も自然に独自の姿となつて来るといふことは、私は一つの不思議な現象だと思ふ。雁金には常常から家系が代代勤王をもつて鳴つてゐたために、彼の行為には、国家といふ観念が大海のやうに押し迫つてゐたことを私は見受けたが、（中略）彼の行為の上では、およそ何事によらず、ただ自身が正しいと直覚したことのみに驀進するといふ勇壮果敢な表現をとつて少しも怪しまなかつたところに影響した。

これは、雁金の偶然性の強い、突飛な行為に必然性をもたせるための、いささか無理な理由づけのように思われる。ごく素朴に考えてみても、勇壮果敢な行為をする人間を設定するのに、「紋章の背光」を背負わせることが、不可欠の条件ではあるまい。勤王の家系をもたず、祖先の血に何ら呪縛されない自由な人間、それは、貧農のせがれでも、一漁民の子孫であっても、また、祖先らしきものをもたない人間であってもよい、むしろそういった人間の方が、まったく自由な、勇壮果敢な行為に走りやすいのではないだろうか。

だが、横光の日本主義への関心は「紋章」だけに見られるものではない。すでに、「上海」において、あの掃溜的虚無の世界での、参木の唯一のよりどころとして、祖国「日本」を取り上げ、また、「旅愁」においては、日本主義をあれほど大きく取り上げたのであるから、一貫した脈絡をもっていることは明らかである。しかしながら、「今ほどヨーロッパ精神が日本精神を軽蔑してゐる時代はないであらう。――雁金のその後の悪戦苦闘も、根元はことごとくこの世人の軽蔑から始つてゐるといつても良かつた。」という、この前半部は、西欧的合理主義が日本古来の精神主義を圧倒している時代状況を考えあわせると首肯できることであるとしても、後半部の、雁金の悪戦苦闘が、すべてこの対立に起因しているとする設定は強引す

ぎるし、それは、物語の全体に十分浸透しているとは言えない。要するに、雁金の相貌と行為を「日本精神といふものの実物」とする性急な結びつけは、決して必然性のあるものとは言えないのである。

物語の展開の中から抽出すれば、雁金の悪戦苦闘は、素人の成功が、世人から妬まれ、圧迫されることが原因となっているのである。雁金の成功は、「素人の方が理論を無視してむやみ矢鱈にやるから犬も歩けばで、たまにやあたることがある」式の発明であって、隠元豆の醤油、魚屑や鰹節の煮出殻の醤油、バナナの皮で造る酒、酵素利用の魚の干物など、いずれも、安直なと言ってもいい程度の思いつきの、偶発的な成功としか思われないものである。例えば、バナナの皮を体温であたためたり、魚の肉を米糖でつつんで、その中へ焼火箸を突込むといった奇妙な脱臭法をヒントにしたりするのだが、それが次々と成功して、逆に、学閥の泰斗である山下清一郎の発明による事業が失敗し、さらに、利益の分配にあずかろうとする多多羅の申し出を拒否して敵にまわすといったことが加わって、雁金の悪戦苦闘は激しくなるのである。これらの雁金の行為が、「紋章の背光」を背負っていないことは、すでに明瞭であろう。ただ、雁金のような偶然をたのみとする発明家は、学理的な研究者ほど世人に信用されていないだろうということは、一般的には言えるかもしれない。しかし、そのことを、直ちに、ヨーロッパ精神が日本精神を軽蔑するといふ点に結びつけることは無理であるし、それを、雁金の受難の起因とすることは、とうてい不可能である。

「紋章」の一面のおもしろさは、雁金の特許にまつわる果敢な闘争と、多多羅一派によって、社会の裏面的な悪が暴露されることにあるのであって、雁金という人間像は、そのような行為を通してではなく、対立的な位置にある知識人山下久内の内面の問題に照らされて生かされるように仕組まれているのである。

その山下久内は、自意識の過剰に悩んでいる近代の知識人の典型として設定されている。

一見するところ、山下久内は頭が悪さうに見えるが、しかし、これはあまり頭脳が良いために密集して来る映像や内部に閃く抽象物の氾濫に、適度の処理を失ひがちなためであらう。多分、この久内は内面の複雑さに圧倒せられつづけて、勘は場違ひに絶えずうろうろと遅れ走せに活動させてゐる人物に相違ない。（中略）思ふに山下久内は、必ず左様に高い部分で今や混乱に混乱を重ねながら、うづくまつてしまつてゐる近代の知識人にちがひなからう。

さきに引用した青野季吉の文章にも述べられていたが、これは、当時のインテリに多く見られた現実の姿であろう。彼は大学の法科を卒業して七年を経ていながら、いまだに就職もせず、自意識の過剰に悩みながらも、身の処しかたを真剣に考えている善良な青年であるが、ただ考えるばかりで、少しも行動に出ることができないでいる人物である。「意識の自由さに一種異様な不自由さを感じて異常に崩れ出す」という個所から推察すると、ジイド流の、あらゆる既成のモラルを越えたところに精神の自由を求め、それが得られれば、また再びそれから逃れようとする、非常に高次元の、とらえがたい、複雑な内面を有する人物であることがわかる。このような要求は、日常的な生活の段階においては、非常に実現しがたいことである。しかし、久内はそれを求める。知識人はその実現を願って悩

みぬくのである。彼の求めているものの実体は何か。

久内は、以前雁金と婚約するところまでいっていた敦子を妻にしているのだが、衝動的に敦子に近づこうとする雁金に対して、家庭を守るための防御の態勢をとることはせず、敦子を雁金に会わせようとする。その結果、敦子は、雁金の貧困への同情もあり、また夫の非行動性への嫌悪もあって、雁金に接近していって、夫婦の間に微妙な陰がさす。しかも、久内はそのことを十分に承知しているのである。一方、雁金が以前縁談を断った初子と久内との間に恋愛関係が生じているのだが、久内は、その初子を、再び雁金と結婚させようとする。――このように述べてくると、これは、「寝園」「花花」「雅歌」などの世界と、まったく同じであることに気づくであろう。自己の確固たる生きかたを定めることができず、常に周囲の人たちとの相対的なかかわりの中で揺れながら生きている、近代知識人の、不幸な姿である。

横光が相対的な生きかたに不幸を見たのはごく初期のことであって、「悲しみの代価」において、すでに、愛の相対的な構造と、その不幸な結果を定着させている。われわれは、自己を意識すると同時に他者をも認めざるを得ず、自己の行為は、他者との関係のうちに決定されて、結局は、自己の絶対的な生きかたはできなくなってしまう。「日輪」における卑弥呼は、男たちの上に君臨するかのように見えながら、実は、絶対的な生の喪失を嘆いているのである。そしてこの認識は、「上海」という現実的な舞台の上で確かめられ、「機械」において、この相対的な人間関係こそ現実だという、決定的な現実認識に至っているのである。「機械」は、図式的に作られているが、それを大がかりに物語化したものが「寝園」以下の一連の長編だと言ってよい。こうして、相対的な人間の生きかたを、近代の知識人のもつ現実であるとして提出したものの、相対的に揺れ続ける人間の意識は、結局は、自己喪失という不幸な事態におもむいてしまう。その不幸の深さは、「機械」の終りの部分にある「私」の叫びを思い起せば、十分了解できるであろう。

久内は、そうした相対的な自己に嫌悪し、自己の回復をはかろうとするのである。

> 俺が当分の間家出をしてひとり生活したいといふのは、つまり俺といふものがちつとも俺の自然な動きをしようとしないからなのだ。俺は一度自分の自然なところを見て、心を整へてからでなくちや、俺の心といふものが自分に納得させるわけにはいかんぢやないか。ところが、お前は俺の行動ばかりを見て、いちいちひつかかつてくるとなるとますます俺も平衡を失つていくばかりだからね。一度それで俺は俺になるから、お前もお前になると良いのだ。後はそれからもう一度お前も俺も建て直しだ。

ここでいう「自然」とは、相対的に揺れつづける自意識から解放されるか、越えるかして、意識と行為とが真の統一を獲得した状態を指すのであろう。窪川鶴次郎は、「自意識とは個の生活における認識と実践との統一的モメントへの自覚に他ならないと思ふ。この統一的モメントにおける力が弱まるとき、私たちは特にこの自意識を自意識として、或は過剰として特に感じるにいたるのである。」（「文学の通俗化と純粋小説論」）と、自意識についての定義的な言いかたをしている。つまり、認識と実践、あるいは意識と行為とが統一できないで分裂している状態から、久内は逃げ出そうとしているのである。家出して妻と別居するのでは、分裂する自意識を越

えることにはならない。逃避にすぎない。だが、久内は、逃避によってでも、相対的な人間関係の中で失われた自己を回復しようとするのである。

「それなら別れてゐるのもたまにはいいわね。」

漸く上機嫌になつて来たらしい敦子を久内は見ながら、自分の云ひたいことはまだ半分も説明してない云ひ足りなさを感じた。が、しかし、それにもかかはらず、敦子の機嫌の良さについつり込まれて、もう平安な心になりかからうとしてゐる自分を知ると、とどのつまりはこのやうなものなのかとまた突然思はぬ淋しさに襲はれるのであつた。

相対から逃れ、自己回復をはかろうとする久内ではあるが、敦子の行為に影響されることは避けがたく、「とどのつまり」は、やはり相対の世界から逃げおおせることはできないのかと「思はぬ淋しさ」に襲われる。久内の、相対世界での自己喪失感は、これほどに根深いものであるといえよう。それだけに、自己の「自然」を求める願いは切実なものとなる。

そうした相対の世界とはかかわりなく、自己に忠実に、果敢に生きている対極の人物が雁金なのである。

私は久内のやうな知識の深みに達してゐるものにとつては、雁金のやうな行為の世界で実行を主として困難に身を突きあて、貧窮をものともせずに立ち働く人物といふものは、限りなく尊敬に価ひする対象となつて映つて来てゐることなどは、さほど理解するに困難なことだとは思はなかつた。

「私」なる人物の推定の形ではあるが、久内が雁金を尊敬の対象とし、関心を示す事情は、右の文章によって明らかである。しかし、横光は、雁金に「紋章の背光」を背負わせ、久内を茶会に出席させて、茶法の精神統一をもって合理的なヨーロッパ精神を越えさせようとするのである。

今は恐らく世紀の違ひこそあれ、最も戦国の昔に似通つた心の乱れが万人の上に流れてゐるのである。わが国の文物の発展が何んといつても茶法を中心に置いて進展して来てゐる以上は、精神の統一の仕方は利休に帰つてみることが先づ何よりの近路に相違ないと、さう久内は思つたのにちがひあるまい。

わが国の文物が茶法を中心にして発展してきたということは、いささか怪しげな、独断的な史観だと思うが、いま私には、これを批判する用意はない。しかし、このことが、「紋章の背光」を背負っていることになっている雁金のイメージと久内の願望とを重ね合わせるための設定として、かなり無理して考え出されたものであろうということは言ってもさしつかえないと思う。これが、のちの「旅愁」の日本主義につながっていることは明らかであるが、久内の関心は、そうした日本古来の伝統的な精神主義に直結するのではなく、雁金の「思ふことと実行することが常に同一になって運動してゐる」点にあるのであって、雁金の「意志の強さと実行力」とが久内を救うものなのである。

僕には雁金君が発明するからどうかうといふんぢやないのだ。あの人は何をしようと、そんなことは、ただ僕一人にとつちや初めつからどうだつて良いので、あの人が僕にとつて有難いのは、僕の精神や想像力を誰よりも美しくしてくれるからなんだ。つまりあの人は、僕の意識や情熱といふやうなものを、さきも云つた物や思想を所有するといふやうな浪漫的な感傷主義から、全く自由にひき離してくれるのに大変便利な人だつたのだ。

僕の愛情とか正義とかいふような高尚なものは、これから始るのだ。僕はまだまだこれからがいよいよ僕なんだ。

雁金は、一攫千金を夢みて発明の道に入ったのであったが、狂気のように発明にとりつかれてからは、ただ発明することだけが彼の目的となり、特許をとってもすべて民衆に解放する純粋さをもつようになっていった。右の文の「浪漫的な感傷主義」や、「所有の観念」を離れた「自由な精神」とは、そのような雁金の、現実生活の世界から離脱し、超越した境地をさしているらしい。富貴を求めることは、相対的志向の一つである。それを捨てて、発明のみに生きる雁金の純粋な姿は、まったく相対的な認識を離れた、久内にとっては、絶対的な輝きをもつ、自由な精神であったろう。こうして、雁金像は、久内という自意識の過剰に悩む知識人の内面において、明確な像を結んでいくのである。

ここでは、久内と雁金とが、相対的に形象化され、雁金の行動性が久内の知性の中にとりこまれることによって、理想的な統一の世界への発展が期待できたはずである。この段階においては、「紋章」は、「知識人回復」（青野季吉）の希望を託しうるものであった。

だが、横光は、「紋章」の結末において、それを放棄しているように思われる。久内は知識人の回復を、あえて相対的な現実のなかで行なおうとして、再び自家へ帰る。

彼は父と敦子とをうち捨てて一人自分の動揺を整へようと努力してゐた昨日までの行ひは、何の効果のあるものではなかつたと、強く思ひ始めて来た新たな心の動きに乗り出しかけてゐるのだつた。

「一番面倒なこと、とにかく、俺はそ奴をやらう。」とかう久内は突然に、大きな声で云ひ聞かすやうに思つた。

彼は悪行のために傷つき倒れた父を負ひ、どちらを向いて良いのか分からぬ敦子を負つて、歩くだけは歩いてみようと決心すると、他のことはどちらでも彼にとつてはもう良くなつた。

「自然」と「自由」を求めて自己を回復しようとした、その方法が、別居という逃避によって行なわれようとした、そのことに久内は気づいたのである。そして、相対的な、誰しも逃れることのできない現実の世界に帰って、そのなかで、意識と行為の統一をはかろうと思いなおしたのである。それは、大変に困難な、「両御」なことであるにちがいない。久内は勇気をもって逃避をやめ、困難な道を進む決心をした。しかし、それは、結果的には、相対世界での埋没でしかなかったようである。

自由といふのは自分の感情と思想とを独立させて冷然と眺めることの出来る闊達自在な精神なんだ。雁金君なんかは僕にとつちやたしかに敵だが、敵なればこそあの人の行動は、僕に誰よりも自由といふ精神を強く教へてくれたのだ。僕は雁金君に負かされ詰めだけれども、結果としてはたうとう僕の方が勝つたのだ。

久内は勝利を叫んでいる。久内は、雁金的要素を十分に学びとり、それを相対の世界で実現しうることを信じているかのようである。青野季吉の「知識人復活の宣言」と見なす根拠は、このあたりにあるのであろう。しかし、それはあくまでも「宣言」であり、期待にすぎないのである。かれも、「残る問題は、その精神の自由のじつさいの内容であり、一層つき詰めた個人的、社会的の意義であるが、それはも早や『紋章』の世界から離れたものであり、横光氏のつぎの作品においてとうぜんに問題とされるものであらう。」と述べて

いるが、果して、次の作品において、それが追求され、実現されているであろうか。「紋章」に続く、「時計」「盛装」「天使」「家族会議」「春園」「鶏園」などを見渡してみても、右のような、久内の願望の達成された人物は一人も見当らない。これらの長編は、「寝園」と同じ、相対心理の遊戯的な繰り返しにすぎないものばかりである。ということは、「紋章」で宣言した知識人の回復が、観念的には可能のように見えても、実際には実現不可能なため放棄されてしまったからなのであろうか。久内の叫んだ「勝利」は、幻影にすぎなかったのであろうか。

「紋章」以後の作品を加えてこの点を考察するならば、この「勝利」の声を、「知識人回復宣言」と見ることはできない。それは「知識人優位宣言」でしかない。

俺はなるほど父にぐらべては、因循姑息で、為す何事もない人物だ。しかし、俺は為すあるべき人物よりもおのれの不幸を知ってゐるのだ。

この久内の思いは、父ばかりでなく、行動人雁金をも〃物思わぬ人〃としておとしめ、自意識の過剰に悩む自らを優位に置いている証拠としてよいだろう。久内の「勝利」の叫びは、物思うゆえに知識人の方を尊しとする、自己慰撫的なものにすぎなかったのではないか。横光は、久内を通して育ててきた雁金の価値をここで抱殺し、久内を絶対化してしまった。

青野季吉の期待に反して、宣言に続く知識人回復の物語は書かれなかった。われわれは、雁金と久内を合わせたような人物、あるいは、久内の中に雁金を含みこんだような人物を期待したが、それは実現されなかった。宣言はしたものの、あまりに困難な問題なので、再び「寝園」型に逆もどりしてしまったのかもしれないし、また、それが問題提起に終ったのは、分裂した自意識をさらに高度な次元に高め、統一を求める、ジイド流の現代小説への関心が、観念的なものにすぎなかったか、あるいは技術的なものにすぎなかったからではないか、とも考えられる。

そうだとすると、横光の自意識に関する考察、とりわけ、知識人の不幸に関する認識の根は、案外浅いものであったのではないか、と言わなければならない。そこに「紋章」を雁金の物語と見てしまったり、「風俗小説」という裁断を可能にしたりする要因がひそんでいるのではないかと思われる。また、「旅愁」における日本主義への移行を容易にしたのも、この根の浅さが原因しているのではないかと思われるのである。

三

「紋章」を論ずる場合に欠かすことのできないものに、「四人称」の問題がある。最近では、「四人称」を用いた作品は「機械」であるとする説が出つつあるようだが、人称として明確な形をとっているのは「紋章」における「私」であろう。

横光は「純粋小説論」において、「今までの心理を崩し、理智を破り、感情を歪め」る、混乱した「自意識といふ不安な精神」は、「自分を見る自分」という新しい人称を生ぜしめたために、古いリアリズムではリアリティを与えることができないとし、そこに「四人称の発明工夫」が必要なのだと言う。

寺田透のことば（「紋章」―『文芸』横光利一読本）を借りれば、「紋章」の「私」は「実体」ではなく、「機能」である。また、河

上徹太郎は、この「私」の効果を、非常に肯定的に見ている（河出版『横光利一全集』第五巻解説）。

しかし、「四人称」の設定については、否定論が多い。当時のものは、川端康成の「『純粋小説論』の反響」（昭10・9）を見れば明らかだが、中村光夫の「純粋小説論について」（昭10・5）のように、この程度のことなら三人称で書けるといった「四人称」の存在そのものの否定をはじめとして、窪川鶴次郎の「自意識を独立的な精神現象として絶対化する」（前出）という説が、その代表的なものである。最近のものでは、小久保実の、「私」は人間の条件を体験しないのだから他の人物との内面的なつながりは期待できないとする説（「『純粋小説論』の再検討」（昭41・8）がある。これらは、ほとんどが抽象的な論なので、ここでは、「紋章」の内部に立ち入って考察してみたい。

「私」なる人物は、はじめは、雁金によく随伴し、雁金を動かす演出者のような役割をつとめるが、雁金は「思ふこととすることが同一」の一面的な行動人であるから、「自意識といふ不安な精神」をもつ久内の方を対象としなければならない。

「私」は、松山という姓をもつ文学者で著書もある人物だが、ほとんどその実体はなく、久内と共鳴する精神的交流をもつだけである。この「私」の機能は、「一見するところ山下久内は頭が悪さうに見えるが、しかし、これはあまり頭脳が良いために密集して来る映像や内部に閃めく抽象物の氾濫に、適度の処理を失ひがちなためなのであらう。」以下、「……相違ない」「……ちがひない」「……ちがひなからう」といった具合に、久内の内部を推察する点に、もっとも明瞭に表われている。右に引用した個所は、知識人の性格を定義したような断定的なひびきをもっているが、形式的な面から云えば、「四人称」の機能をもたせる意図をもって書かれたものであろうと思う。このほか、「……かもしれない」「もしかしたら、……かもしれたものではない」「……のではあるまいか」「もしさうでなければ……と思つた」という風に、「私」が人物の内面を推察する形で、その機能を発揮させようとしている。

久内は火鉢の灰に眼を落しながら煙草を吸つてゐたが、忍ぶべからざる妻の謝罪を忍ぶ自身の感情から、わざとらしい衒ひ気のふと盛り上ることを意識する苦痛にうち悩まされると見えて、さきから、妻の言葉にしたがつてまた顔を赧らめつづけてゐた。

外面的な行為は、煙草を吸うことと、顔を赤らめたことだけであるが、その屈折した意識は「私」の眼を通して、右のように描かれるのである。おそらく、横光としては、このような内面を、作者の視点で断定的に提出することを避け、「私」に反映させて示すならば、自意識の不安定な状態をリアルに描くことができると考えたのではあるまいか。

しかし、次の文章と比べると、四人称の「私」の眼を必要とする理由は、はなはだ希薄になってしまうであろう。

この彼の心の様子は急激に襲つて来た疲労によろめくときのいつもの彼の習慣とはいへ、しかし、今日の苦しさに絞め上げられた自分の興奮にあやつられた所作事のやうに思はれる不安さが、刻刻色濃く増して来るのを感じた。どこか本末顚倒の感じである。けれども、何か身を吸ひ込むやうな越え難い深さを覗

けば、人は今の自分のやうに本末顚倒の行為をしなければ、これを克服する術はあるであらうかとまた久内は考へた。

これは、「紋章」の後半、「私」が姿を消して、普通の三人称小説の形式になっている個所であるが、さきの「私」に反映させて示した意識以上の複雑な内面がとらえられていると言ってよい。この結果からすると、四人称の「私」の有効性は認められないことになる。河上徹太郎は、「作中の人物が独り歩き出来るやうになると、『私』は用がなくなって、いつの間にか姿を消す」と言っているが、果してそうであろうか。「独り歩き出来る」とは、作者が「私」を押しのけて、久内に乗り移り、一体化してしまったことを意味するのではないか。

しかし、「四人称」の効果も皆無とは言えない。前章の結論と合わせ考えるならば、四人称の「私」に意識を反映させて進められていた前半においては、久内と雁金とを相対的に対象化し、久内的要素と雁金的要素とを合体融合させて、意識と行為とを統一する知識人回復の夢は可能と見えたけれども、後半「私」が退いてからは、作者は久内と一体化し、ただ単に知識人を優位とする結果をもたらしてしまったと言える。このことからすると、「四人称」の設定と、意識の相対的形象化とは、あながち無縁とは言えまい。これを直ちに普遍的な方法として一般化することは危険であろうけれども、右のような意味においては、「四人称」も有効な一面をもっていたことになろう。しかし、横光は、この方法を途中で放棄し、自意識の問題を根の浅いものにしてしまった。

横光が自意識という困難な現代の問題にとりくんだ意義は十分認めることができるとしても、右に見てきたような限界も同時に認めねばならないであろう。

――広島大学大学院学生――